

# 茨木市立文化財資料館蔵『七秘蹟と七美德がある 主の祈りの七祈願』の受容空間

蜷 川 順 子

## 1. はじめに……問題の在処

茨木市立文化財資料館に保管されている6枚の紙本銅版画シリーズ「七秘蹟と七美德がある主の祈りの七祈願」（いわゆる「天使讃仰図」）〔図1～7〕をめぐって、筆者はこれまでに、画面に記されている銘文および図像学的主題を確認し、海外に残る関連図版との比較に基づいて、ある程度まで制作者を絞り込んだ。また、表紙のカルトゥーシュに一部残っている文字から、断片的ながら注文主や制作地に関する情報を得た<sup>1)</sup>。さらに、本来はそれぞれ独立した観念群であるはずの七秘蹟と七美德が、七祈願を軸に結びつけられるという基本構造が、16世紀のプロテスタントの宗教改革の刺激を受けたカトリック改革派から生まれたものではなかったかという仮説をたてた<sup>2)</sup>。

本稿はこれらの研究成果を踏まえて、本銅版画シリーズの受容者層と用途について、考察をすすめるものである。まず、受容者について、発見場所と地域の特性から、この地域の宣教実態を考察する。次に、銅版画の性格を再考し、銅版画が教義を伝えるとともに、儀式のモデルとして用いられた可能性を考え、主の祈りを中心とした構成について立てた仮説の妥当性を補強する。

## 2. 受容者に関する考察

### 2-1 千提寺・下音羽地区の切支丹遺跡の発見

本銅版画シリーズの受容者は、千提寺・下音羽地区を中心に茨木で70点ほど

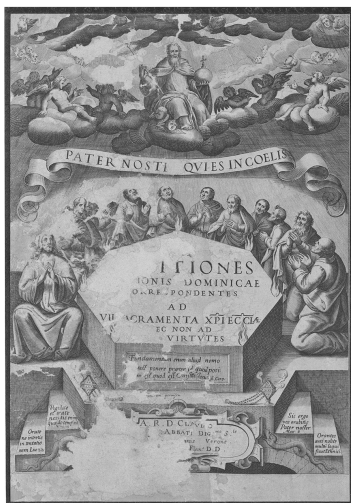


図1 「主の祈り（七請願）」  
16世紀後半～17世紀  
31.2×21.6 cm 茨木市文化財資料館



図2 「洗礼」16世紀後半～17世紀  
32.7×21.9 cm 茨木市文化財資料館



図3 「堅信」16世紀後半～17世紀  
31.2×21.6 cm 茨木市文化財資料館



図4 「品級（叙階）」16世紀後半～17世紀  
31.3×21.5 cm 茨木市文化財資料館



図5 「聖餐（聖体）」16世紀後半～17世紀  
31.3×21.6 cm 茨木市文化財資料館



図6 「婚姻（結婚）」16世紀後半～17世紀  
31.3×21.6 cm 茨木市文化財資料館



図7a 「懺悔（告解）」1598年  
31.6×22.5 cm パリ国立図書館  
茨木本では対応図がない。



図7b 「終油」1598年  
31.4×22.4 cm パリ国立図書館  
茨木本では対応図がない。

発見されたキリシタン遺物と深く関わっている。これらの遺跡は、大正9（1920）年に、寺山で二支十字と洗礼名「マリヤ」が刻まれたキリシタン墓碑〔図8〕が発見されたことをきっかけに調査・発掘された。この墓碑の発見者は、当時小学校教員であった茨木市大字安元の教誓寺住職藤波大超である。藤波は、この地域にキリシタン大名だった高山右近やキリシタンの伝説が残っていること、独立（個人）墓が多いこと、寺の宗旨がまちまちで宗教上の不安定が伺えることに注目し、発見前年にあたる大正8（1919）年2月に千提寺地区の調査を開始した<sup>3)</sup>。その後、はじめは協力をしづんでいた東藤治郎（あずま とうじろう）所有の寺山から、表面に二支十字<sup>4)</sup>（上下に短長の横軸が二本あるようにみえる十字架で、上の短い軸は INRI : Iesus Nazarenus Rex Iudaeorum の罪状札になっている）、名字「上野」とクリスティアン・ネーム「マリヤ」が中央に書かれ、その向かって右に慶長8（1603）年、左に正月十日と陰刻されたキリシタン墓碑が発見されたのである<sup>5)</sup>。所有者やその親族達はその存在

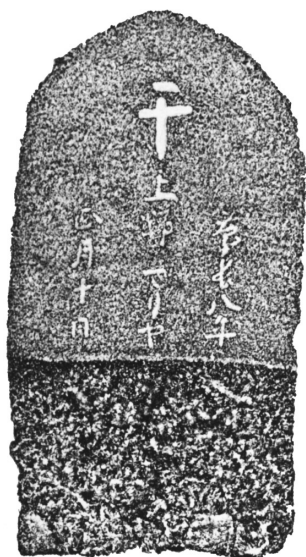


図8 慶長八年銘キリシタン墓碑（「上野マリヤ」銘墓碑）花崗岩 慶長8（1603）年  
66.5×38.0×18.2 cm 茨木市立文化財資料館



を知っていたようだが、禁教令の高札がとりのぞかれても警察からとがめられることを恐れていた<sup>6)</sup>。藤波はこの調査をすすめる過程で時代の変化を説明し、老婆達からアベマリヤのオラシヨを聞くことが出来たと述べている<sup>7)</sup>。

甲山堅は、先祖来の探究成果などを駆使した上笠五兵衛に関するノンフィクション・ノベル『ザビエルコード』において、特別な身分の女性以外、摂津ではとくに女性の洗礼名の多くがマリヤだった可能性を指摘し、また、摂津国三島の賀美郡という地域の名前や、「上（かみ）」がつく氏が多かったことから「上野まりや」は「かみのまりや」ではなかったかと推測している<sup>8)</sup>。

千提寺の東家では、大正9（1920）年9月に、東父子、藤波大超・大圓兄弟、大超の義兄にあたる仏教史学者橋川正立ち会いの下「あけずの櫃」[図9]が開封され、第一祈願を描いた銅版画が発見された。その北にある下音羽からも、大正11（1922）年に、奥野慶治によって、納屋の二階の片隅にあったあけずの櫃から、残る5枚の銅版画が発見された<sup>9)</sup>。原画に当たるリヨン版などは8枚シリーズなので、残る2枚は日本に持ち込まれたものの、失われた可能性が高い。

## 2-2 千提寺・下音羽地区の寺社と交通路

千提寺という地名は、茨木市最北部の地域で中世荘園支配の象徴であった忍頂寺（真言宗）の塔頭千提寺があったことに由来するが、浄土真宗の寺院とな

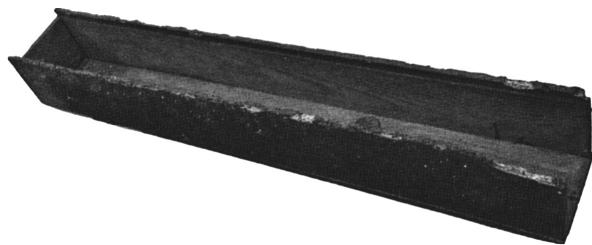


図9 あけずの櫃 木製 17世紀  
82.0×10.5×10.5 cm 茨木市立文化財資料館

り、明治時代頃に廃寺、現在は寿命院を残すのみである<sup>10)</sup>。忍頂寺は、竜王山の西南の地に平安時代の初めに僧三澄により建立され、貞観2（860）年清和天皇から寺号を賜り勅願寺となった。当時は23の僧坊をもつ山岳寺院として栄えたが、古代末から中世初めに行なわれた荘園支配の象徴となり、仁和寺の末寺として付近の五箇村（寺辺、銭原、音羽、泉原、佐保）に16町歩の荘園もち勢力を誇った。しかしながら中世末になると、「忍頂寺は織田信長に保護されたが、高山右近がキリスト教布教のため寺領を没収し衰えた」と記されている<sup>11)</sup>。千提寺・下音羽地区はこの寺領に含まれるため、まずこの記述を検討したい。

荘園支配が崩れると、荘園の荘官として成長した土豪が、自らの基盤となる村に城館を築き、村を支配する小領主としての性格をもつことで村落共同体のリーダーとなった。とくに有力で、自分の村だけでなく周辺地域にも影響をもつようになったものは、国人と呼ばれた<sup>12)</sup>。戦国時代の摂津国域は、行政区分というわけではないが、上郡、下郡、欠郡、北郡の4エリアに分けられ、上郡では守護が、下郡では国人が力を振るった<sup>13)</sup>。中でも茨木氏、中川氏、高山氏、池田氏、荒木氏、安威氏、余野氏など、その居城である中世の山城跡として福井城跡、安威城跡、泉原城跡、佐保城跡が確認されている〔図10〕<sup>14)</sup>。彼らは互いに牽制しあい、小競り合いを繰り返しながら地縁・血縁で結びつき、摂津国外に対しては摂津国人として団結していた。摂津の国人たちの多くは摂津および丹波の国守護であった——室町幕府三管領のひとつ——細川氏本家（京兆家）の被官（家来）となっていた。

文明11（1479）年、半済課税をめぐる「摂津国一揆」により、興福寺や春日社などの寺社権門の支配を廃する動きがあり、国人茨木氏は細川政元の命で守護代業師寺元長に征討されている。この出来事が起った文明13（1481）年までを、片岡はⅢ期に分けた摂津国茨木の空間構造と交通路発達における第Ⅰ期とみなしている<sup>15)</sup>。この画期には、茨木を東西に横切る西国街道北側の山地緑辺に寺社が立地し、十日市で西国街道から分岐して大門寺に至る南北の道の存在



図10 「千提寺南遺跡周辺遺跡群」(『茨木市千提寺南遺跡』図3)  
関連城跡に●を付けた。

が想定されるが、それより北に通じていたかは不明である。社寺としては古くからの忍頂寺以外に認められず、たとえ里道があったとしても、千提寺・音羽地区を通過する街道は確認されない。守護細川氏の所領は、摂津や丹波にあったため、大坂や京都から丹波に繋がる街道は必須だったが、忍頂寺近くを通る亀山街道の成立はもう少し遅いようである。

第二期は元亀元（1570）年の白井河原（郡山）合戦までで、この間に守護勢力の浸透により摂津国上郡、北郡の在地領主が細川氏の政権抗争に巻き込まれるとともに、次第に在地性を失ったとされる。守護代薬師寺氏が茨木を在所と

することで、その中心性が強まっていたが、安威にも屋形が建てられ、茨木の中心性は一極的ではなかった。また、大門寺以北の安威川沿いに正覚寺や法林寺が立地し、安威川沿いに里道レベルではない幹線道としての交通路が想定される。この街道（安威ルート）は茨木と丹波国を結ぶ交通路と考えられるが、「清坂村」付近から「上音羽」付近、「国見」を通る別の街道が併存していた可能性がある。後に亀山（清坂）街道と呼ばれるこのルートは千提寺・音羽地区近くを通るが、新たな寺社の立地はないため、急な人口増加があったわけではない。このことから片岡は安威ルートが主要街道だったとみなしている。

右近の父である高山飛驒守ダリヨが、和田惟政の家臣として高槻に来たのが元亀元（1570）年なので、第Ⅱ期の街道の展開はキリスト教の布教とはあまり関係しない。

第Ⅲ期は、白井河原合戦から元和元（1615）年の一国一城令の布達までとされる。この間に茨木城主・代官は中川清秀→中川秀政→安威に佐→川尻秀長→片桐且元と変遷する。亀山街道沿いの上郡では、天正4（1576）年に銭原の乗雲寺が、また元和元（1615）年に下音羽の高雲寺が創建されているが、白井河原合戦で多くの死者が出たために、この時期に多くの寺社が新たに設立された茨木城下やその周辺などに比べると、その数はかなり少ない。

荒木村重から高山飛驒守ダリヨに高槻城が与えられたのは天正元（1573）年のことで、同年末か翌年に家督を息子ユスト（ジュスト）右近に譲った。同年彼は自筆の文書で高槻付近の寺にあてて、寺領や特権を承認する書類を出している。同年12月3日には本山寺、翌天正2年3月12日にまた本山寺、7月4日に安岡寺、7月23日には忍頂寺に出した<sup>16)</sup>。このことから、忍頂寺の寺領の管轄は高山右近ユストにあったようだが、キリスト教布教のために没収した事実は確認されない。高山氏は、独自支配の範囲であった、高槻城が所在する上郡の島上郡、島下郡北部で文書を発給したようである。書状をだす形での支配は、同様のことを行なった荒木村重の場合と同じく強固ではなかったと考えられる<sup>17)</sup>。忍頂寺寺領の減少があったとすれば、莊園制崩壊に伴う土豪や国人衆



との関係を考慮するべきであろう<sup>18)</sup>。

それでは、キリシタン遺跡がある千提寺・音羽地区でのキリスト教布教をどのように考えればよいのだろうか。以下で摂津のキリスト教布教との関係を考察する。

### 2-3 摂津のキリスト教布教と千提寺・音羽地区

フランシスコ・ザビエルが日本宣教に向けてインドのゴアを発ち、鹿児島に到着したのは天文18（1549）年のことである。彼は京都で天皇に会いそこに教会を建立することをめざして、平戸、山口、堺を經由して、天文20（1551）年に京都に到着したが、天皇謁見は叶わず同年11月に豊後からゴアへの帰路についた。その後、永禄2（1559）年にガスパル・ヴィレラ神父と盲目の日本人宣教師イルマン・ロレンソ<sup>19)</sup>らが、大名大内義鎮らの紹介状を手に都に入り、翌年將軍足利義輝に謁見して宣教許可の制札を得る。しかしながら比叡山や近江六角氏家臣と接触するも、永禄5（1562）年、一行は追放されて堺へ行く。

永禄6（1563）年、松永久秀は比叡山から宣教師追放の要望を受け、与力の結城忠正らにその可否を諮問した。結城忠正<sup>20)</sup>は、ロレンソを奈良に呼んで宗論をかわした後、明経博士の公家清原枝賢とともにヴィレラから洗礼を受けた。その後高山飛驒守図書も受洗し、翌年久秀から城主に抜擢されていた大和沢城（奈良県宇陀市）にロレンソを呼び、家族ともども150名の者に洗礼を受けさせた。自らはダリヨ、妻はマリヤ、長じて右近を名乗る彦五郎にはユストという洗礼名がつけられた。150名の中には「身分ある人たちや城兵たち」がいたとされるが<sup>21)</sup>、高山氏との関係を考えるなら、この中に摂津国人衆が含まれていたと考えてもおかしくない。永禄8（1565）年にはイルマン・ルイス・デ・アルメイダも沢城を訪れているが、同年、將軍義輝を殺害した松永久秀と三好長慶の争いにおいて図書ダリヨは三好に与したため、翌年沢城を追放されて摂津高山へ戻った。

永禄11（1568）年に和田惟政——近江甲賀郡の郷士で、足利義昭の旗揚げに

功績があり、京都所司代に任ぜられて、摂津芥川城主となった——の旗下で右近ユストも戦闘に参加し、高山一家は芥川城に移った。惟政は高槻城四万石を与えられ、高山ダリヨを家老として高槻に呼んだのである。惟政はダリヨを通してキリスト教に関心を示し、ルイス・フロイスらが信長に謁見できるよう取りはからい、京都開教の実現に尽力している。その和田惟政が荒木村重と闘って死去した後、元龜2（1571）年、高山一家は惟政を継いだ惟長に仕えるが、高槻城内ではやがて惟長派と高山派が反目しあうようになる。高山父子は荒木村重と同盟して天正元（1573）年に惟長を放逐し、すでに述べたように、村重から高槻城を与えられたダリヨから、まもなく右近ユストが家督を継ぐことになった<sup>22)</sup>。

右近の生年のはっきりしないが、受洗の時に十歳代前半であることは間違いない。ロレンソの話聞かせ、洗礼を受けさせたのは父ダリヨだったため、高槻城を継いだ頃は教理をあまり理解していなかったとされる。実際に教理を学び直したのは天正2（1574）年に、フロイス神父、イルマン・ロレンソ、ジョアン・デ・トレスを伴って高槻を訪れた、フランシスコ・カブラル神父からである。この第二の回心を経て天正12（1584）年に明石へ転封されるまでの10年間に、高槻領の三分の二はキリシタンになり、また、高槻の教会を中心に領内には小聖堂が20ほどあったと伝えられる。みずからがポルトガルの貴族だったカブラルは、封建体制下では領主を改宗させることが重要だと考えていた。右近ユストの感化を受けて、小西行長、黒田孝高、蒲生氏郷などが受洗し、大名クラス以外にも、彼とともに利休七哲に数えられる牧村兵部、瀬田掃部などがキリシタンになった<sup>23)</sup>。

城主の父図書ダリヨは、家臣や有力者に信仰を働きかけるだけでなく、扶助を伴う組織的布教によって民衆にも信仰をすすめた。たとえば教会には、「4名の組頭」の選出や「改宗、貧者の救済、死者の埋葬、祝祭の準備、来訪する信者の歓待」を担わせた。高山父子は貧しいキリシタンが城内で死んだとき、葬礼で棺をかつぎ、壮麗な葬送行列を行なったと伝えられる。こうしたことも

人口が多い都市部ならではの活動であろう。キリスト教は「都市的」な宗教であった<sup>24)</sup>。

その一方で、千提寺・音羽地区は都市とはいえない。いまだ忍頂寺の寺領に含まれていたなら、右近が発行した書類から推察されるように、寺領としての性格を失ってはいなかった。ただし土豪や国人が勢力を伸ばしすでにその配下にあったのなら、寺領縮小に関わったのは、高山氏がキリシタン領とするためだったとはいえないだろう。その一方で、キリシタンがいたことも遺跡の存在から疑い得ない。ただし高山父子の活動に照らすなら、彼らがこの山間部に布教のため直接赴いたとは考えにくい。上述のように沢城で受洗した150名の中には、強力な国人とまでいえなくても、摂津衆と呼ばれた国人や土豪が含まれていたと考えられ、自領に戻り家族を受洗させたであろう。この地区に残るキリシタン墓地の名前「上野まりや」や「佐保からら」[図11]は、上（かみ）氏や佐保氏の妻であった可能性が高い。高山父子が沢城での受洗から高槻城に

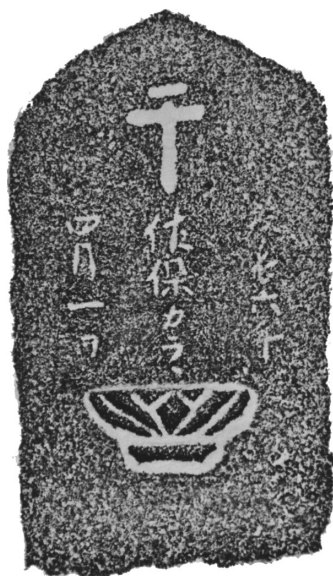


図11 慶長六年銘キリシタン墓碑（佐保カラ）銘  
墓碑）花崗岩 慶長6（1601）年  
45.4×25.8×15.0 cm 茨木市立文化財資料館

入るまでの10年間に、すでに摂津国人衆の間でキリスト教は広がっていたのである<sup>25)</sup>。

こうした中で注目されるのは安威了佐である。安威川に沿って勢力を拡げていた国人安威氏の弥四郎の子として誕生した。天正12年(1584年)ごろキリスト教に改宗し、洗礼名シモンを名のった。フロイスは「了佐は元、高山右近の側近だった」としているが、この受洗が同年に行なわれた高山右近の明石転封と関係するのかどうか不明である。北摂から戦国大名に駆けあがった高山氏と後で述べる中川氏が豊臣秀吉によって転封された後、了佐シモンは摂津四郡十萬石の代官になっているので、摂津では両氏に次ぐ豪族であったと思われる。その後石田三成、小西行長に並ぶ側近として秀吉に重用された。天正14年(1586年)にイエズス会準管区長コエリヨが大坂城を訪問した際接待役を務め、大谷吉継とともにコエリヨへ果物と干柿を持参している。しかしながら翌天正15年(1587年)、秀吉により博多で伴天連追放令が発令される前夜に、彼を尋問したことで知られる<sup>26)</sup>。

摂津国茨木の空間構造と交通路の展開に関して片岡が画した第Ⅲ期は、白井河原合戦のあった元亀元(1570)年から元和元(1615)年の一国一城令の布達までであった。この時期に亀山(清坂)街道が本格的に整備されたようである。安威川沿いに北上する街道もつけられていたが起伏が激しく往来が困難な場所もあったので、丹波の地産物などを運ぶために、土豪や国人の山城を縫うようにつなぐ亀山街道が整備されたものと思われる。ところで、茨木と南にある淀川河岸を結ぶ枝切街道によって、大坂城の玉造口から河内路に入り、鳥飼の渡りを経て茨木の城へ繋がる道が、元亀3(1572)年頃に中川清秀による茨木を中心とした領域支配の過程で整備されたと考えられる<sup>27)</sup> [図12]。大坂城から亀山街道に繋がる道があるということは、本稿の結論部で重要になってくる。

ここで摂津国人衆の中で、高山右近と同じく戦国大名にのぼりつめた中川清秀に触れておきたい。清秀は、永禄12(1569)年に、信長の支援で再上洛を果たした將軍義昭の拠点本圀寺を三好三人衆が囲んだ際、和田惟政や摂津衆と



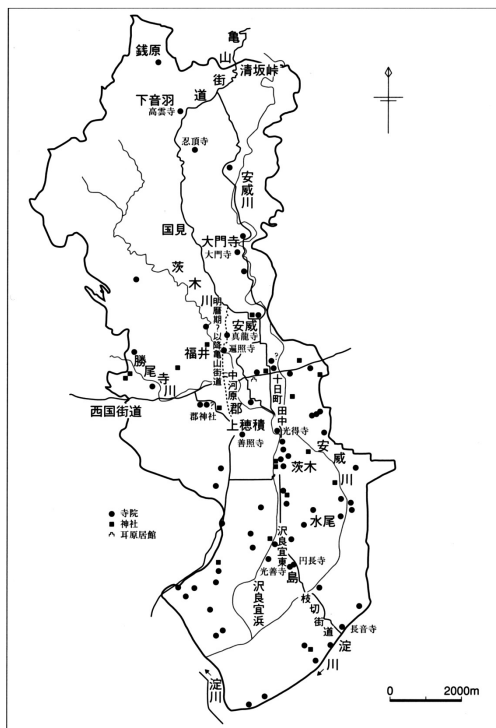


図12 亀山街道および領域幹線道  
 (片岡健「摂津国茨木の空間構造と交通路」図5)

もに三好勢を撃退したことで京洛において名をあげた。清秀は、摂津中河原を地盤とする中川氏の婿養子となった高山党の佐渡守重清の元に誕生したため、右近の従兄にあたる（中川原の場所や、右近との親戚関係については異説がある）。15歳で池田筑後守勝政の旗下に属したが、元亀元（1570）年信濃守を名乗って池田に入城した荒木村重の先手として、各地の城攻めを行なった。将軍家と織田信長が不和になりつつあった頃、摂州生えぬきの荒木村重と新参の和田惟政との間で雌雄を決する白井河原の合戦が始まった。村重側は300丁の鉄砲を集めており、100丁ずつ間断のない一斉射撃を行なって和田側を壊滅させ、

惟政は討ち死にした<sup>28)</sup>。高槻城で惟政を継いだ惟長が、村重と同盟した高山父子によって放逐された下克上関係についてはすでに述べた。

フロイスは、清秀は右近の敵だとしているが、鉄砲を300丁準備できたことや、長篠の合戦の先行モデルとも言える戦略をとったことから、宣教師とまったく無関係だったとは考えにくい<sup>29)</sup>。この手柄により清秀は茨木城下六万石を手に入れた（荒木村重がしばらく茨木城にいたという説もある）。キリスト教に興味を示していた惟政は受洗を目前に没したが、クルスを化粧した前立の冑を被っていたと伝えられ、そのクルス紋が中川クルス〔図13〕と呼ばれる紋章に継承されたといわれる<sup>30)</sup>。

天正6（1578）年、摂津国主荒木村重が石山本願寺と毛利氏に通じ、信長に背くとの噂が流れ、信長は荒木に仕えていた高槻城高山右近と茨木城中川清秀を、前者はキリシタンを使い、後者は古田佐助重然（後の織部正）の仲介を立てて両者が荒木に離反するよう画策した。二人は信長に仕えることとなって、武田勝頼討伐に加わった。その後秀吉による天下統一の過程で、中川清秀は越



図13 中川家紋（中川クルス）竹田キリシタン研究所・資料館展示物  
（大分県竹田市） 筆者撮影

前柴田勝家軍との賤ヶ岳大岩山の合戦で命を落としたが、家督は中川秀政に引き継がれた。天正13（1585）年、秀吉は摂津大坂を居城にするため、中川氏の摂州4郡を召し上げ、一万石を加増して十三万石とした上で、茨木より播州三木に所替えを命じた。摂津国人衆はすでに中川勢に組み込まれていたため、中川の家臣となり、一緒に移り住んだ。ただしすでに述べたように、安威了佐が十万石格の摂津四郡の代官となったため了佐にしたがって残留するものもいた。中川秀政は、秀吉の朝鮮征伐に加わって渡海したが、不注意から命を落とし、同じく渡海していた弟中川秀成に跡目相続が認められたが、知行は半減され、豊後岡に領地替えを命じられた<sup>31)</sup>。

清秀が受洗した記録はないが、キリシタン弾圧を行なった形跡もない。荒木方について受洗前の和田惟政を討ったのは、政治的な問題であろう。甲山は、家督を継いだ秀政、秀成はキリシタンだったかもしれないとみている。岡藩に残るキリシタン遺跡が、近隣の大伴宗麟関係のものばかりではなく、中川家にしたがって豊後岡に移った摂津の国人に由来するキリシタンのものであったことが検証されているからである<sup>32)</sup>。

高槻では高山右近の転封後、城は豊臣秀次に与えられた。秀次がキリシタンを保護した形跡も、キリシタン関係施設を急いで破壊した話も伝わっていない。キリシタンに対しては好意的で、彼の重臣であった信者の庄林コスメを遣わして、京都にいるペトロ・バプチスタやフランシスコ会士たちに施しを与えたこともあった。しかしながら甲山は、キリシタンの領民は隣郡の代官安威了佐シモンに救いを求め、建物や塔は解体されて千提寺周辺に運ばれ、クルスの塔は栗栖山頂に建てられ、天主堂は寺山に、司祭館はセミナリオがあったといわれる場所に移転されたと考えている。

天正15（1587）年、秀吉から突然伴天連追放令が出され、右近ユストは棄教を求められたが応じなかったために、明石領は没収され、一時小西行長に匿われた後前田利家預けとなった。伴天連追放令が出て、改易となっても右近は布教活動を続け、豊臣秀吉が没した慶長3（1598）年に移住した金沢でも、布教

活動をおこなった。ところで、この年の6月にオランダのロッテルダムを出帆して西に向かった船団5隻のうち2隻がマゼラン海峡を経ることができ、最後の1隻リーフデ号が慶長5（1600）年3月に豊後臼杵の佐志生の浜に漂着した。生き残っていた中で、プロテスタントのオランダ人ヤン・ヨーステンとイギリス人ウィリアム・アダムスが大坂城において徳川家康に直接引見した。このときから、カトリック対プロテスタントの抗争が、豊臣対徳川の対立に加わることになる<sup>33)</sup>。

慶長5（1600）年の関ヶ原の合戦以降、元和元（1615）年に大坂夏の陣で豊臣氏が滅び、徳川幕府の支配が確立するまでの間、カトリックの弾圧や禁教令発布の回数は徐々に増えていたが、それでも大坂城にはかなりの数の宣教師がいたといわれる。大坂城落城の際に、城内で用いられた布教のための絵画やミサの道具が持ちだされ、茨木を経て千提寺にもたらされた可能性もある<sup>34)</sup>。上述のように、大坂城から鳥飼の渡しを経て茨木を通し亀山街道にいたる道は確立されていた。

## 2-4 銅版画シリーズが大坂城で受容された可能性

銅版画シリーズが発見された茨木の千提寺・下音羽地区周辺は忍頂寺の寺領から摂津国人の領地になった可能性が高く、国人の間には高山父子が高槻城に入る前からキリスト教が広がっていた。したがって高山父子がこの地域の布教に直接乗りだした可能性は低い。

銅版画シリーズは、宣教師がヨーロッパから持ち込んだもので、例外はあるものの宣教師たちは、カブラル神父が述べたとされるように、領民に直接あたるより、大名や領主に接触する方が効率的に布教できると考えていた。永禄5（1562）年に結城忠正がロレンソを奈良に呼んで公家清原枝賢とともにヴィレラ神父から洗礼を受けたとき、高山飛騨守の受洗は少し遅れたが、1564年7月13日付けヴィレラ書簡にも、10月9日付けフェルナンデス書簡にも高山氏のことは触れられておらず、1576年のフロイス書簡や彼の『日本史』によようやくこ



の件に関する記事が載せられている。すなわち、たとえ大和沢城を任されていたとはいえ、摂津の国人クラスでは、宣教対象としてあまり重視されていなかったことがわかる<sup>35)</sup>。翌年、すてに述べたように高山飛騨守は沢城において家族と身分ある人や城兵を含む150名を受洗させたが、このときヴィレラ自身は危険があるという理由で来城せず、盲目の日本人宣教師ロレンソだけが洗礼を授けた。こうした経緯の中、同時に受洗した可能性がある摂津衆が、本シリーズのような教義の根本を説明する画像を宣教師から託されたとは考えにくい。高山飛騨守ダリヨは高槻城周辺に作った教会で教義に関する説教を聞くように領民にすすめたが、宣教師が直接説教を行なった機会は限られていた。むしろセミナリヨを開いたり、コンタツ制作 [図14] の挽物師を呼び寄せたりして、自前で布教手段を開発する傾向が強かった。

右近ユストは、天正10（1582）年、信長の死に際して安土城のセミナリヨを高槻に移し——このセミナリヨが高槻でダリヨが開いたとされるものと同一のものか、組み込まれたのか、併存したのかは不明——、翌年には大坂でオルガ



図14 高槻城跡地（現在の高槻商工会議所会館敷地）の木棺から発見された珠を復元したコンタツ（ロザリオ）

ンティノ神父を秀吉に引き合わせて大坂城に教会用の土地を確保し、河内岡山の砂の教会を移築させた。翌年には大坂城教会の落成に立ち会っている<sup>36)</sup>。天正13(1585)年の右近明石移封に関する秀吉の真意については諸説あるが、上述のように、右近を失った高槻から宣教用の道具や絵画が千提寺や下音羽に移されたとみる研究者もいる。しかしながらこの時点では伴天連追放令は出されていないこと、またこの追放令が厳しいものではなかったことに留意したい。むしろ大坂城教会が落成して多くの宣教師や大名が交わる可能性があった大坂城こそ、この銅版画シリーズ受容の条件が整っているように思われる。

## 2-5 銅版画シリーズの性格

ここで、以前の研究に基づき、茨木の銅版画シリーズの性格を再確認しておきたい<sup>37)</sup>。この銅版画シリーズが派生した原画は、マテウス・グロイター(1564/66-1638)によってリヨンで制作されたと思われる。現在パリ国立図書館蔵のシリーズの表紙には「リヨンにて、マテウス・グロイター原案印刷、モノグラミスト NAFM 調版 1598年」[図15]の銘が記されている。表紙の記述が同じシリーズまたは断片は、ダルムシュタット、ニューヨーク、ウィーン、ウォルフエンビュッテルなどに残されていることが確認されているため、ヨーロッパでは広く行きわたっていたものであろう。茨木本の表紙は傷みが激しいが、「A.R.D. クラウディオ、ヴェローナの聖ヨハネ修道院長、フラン、D.D.」[図16]と読める。ヴェローナは制作地ではなく、この銅版画シリーズが捧げられた、あるいは認可した修道院長の出身地または赴任地をさすと思われ、フランは制作地フランドルの略記ではないかと考えられる。

グロイターは1594年または95年にプロテスタントのルター派からカトリックへと改宗して、それまで活動していたシュトラスブルクを離れてリヨンへ向かい、フランス王アンリ4世に仕えて、彼のための印刷を行なった。

グロイターはアンリ4世の肖像画の銅版画[図17]を1595年に制作している。アンリ4世は、ブルボン家のヴァンドーム公アントワヌを父に、フランス王



図15 「主の祈り（七祈願）」部分，1598年 パリ国立図書館

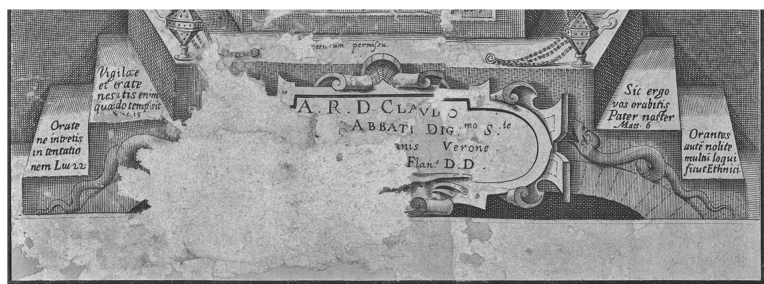


図16 図1部分

フランソワ1世の銘であるナバラ女王ジャンル・ダルブレを母にナバラ領のポー（現、フランス領）で生まれた。ナバラといっても、ザビエルが生まれたハビエル（現、スペイン領）からは200キロメートルくらい離れている。母ジャンヌは熱心なユグノー（カルヴェン主義プロテスタント）であり、その影響で父も改宗しユグノー同盟の盟主となっていた。アンリ4世もユグノーだったが、戦略的にカトリックへ改宗して難を逃れることがあり、またユグノーに戻ったが、カトリックに改宗しないと王位に就けないことを悟って再改宗した。1595年の肖像は前年に行なわれた——伝統的に即位式の舞台だったランス大聖堂はアンリ即位の反対派の拠点だったため——シャルトル大聖堂での戴冠を記念したものと思われる。1598年は、アンリ4世がナントの勅令を発した年である。すなわち彼の即位に反対していたメルクール公の支援を続けていたスペインに宣戦布告をして、ブルターニュを平定した年なのである。この銅版画シリーズに、プロテスタントの批判をある程度受け入れたカトリック改革派的



図17 マテウス・グロイター《フランス王アンリ4世》1595年  
アルベルティーナ美術館, ウィーン

内容があることもうなずける。

したがってこの銅版画は、フランス王という高位の人物の意向をもとに、ある程度プロテスタントを認めたカトリック信者としての王の考えを反映しているとみることができる。そこから派生したシリーズが日本にもたらされたとしても、いきなり千提寺・下音羽に伝えられたとは考えにくい。この銅版画をもたらした宣教師は、ヨーロッパにおける銅版画の成り立ちを知っていたと思われる。フランス王に匹敵する身分の人物に示すことを考えたであろう。また、プロテスタントの批判を受けながら、カトリックの正当性を伝えられる教本とし



て準備されたのではないだろうか？

慶長5（1600）年にリーフデ号で漂着したプロテスタントの三浦按針は、徳川家康に旗本として雇われ、カトリック勢力を敵に回すことになるが、カトリックの側でもプロテスタントの批判を理論的に論駁できる材料が必要だったのであろう。それが本銅版画シリーズだとしたら、茨木本だけに見られる改編が、受容者を絞ってなされた可能性もある。その場合この銅版画は、三浦が仕官した1607年頃から大坂の陣までの間に、大坂城にもたらされた可能性が高く、「結婚」の図像だけを変更したのは、受容のターゲットとした高位の女性たちの中に、豊臣秀頼の母淀君がいた可能性を物語る。そして、元和元（1615）年の大坂城の落城に際して、宣教師たちの手で、あるいはその依頼で持ちだされ、北摂の地に隠され、大正期に発見されるまで「あけずの櫃」に入れられて秘蔵されたという筋書きは荒唐無稽なものでもなかろう。

### 3. 大坂城のキリシタンと宣教師たち

本銅版画シリーズをもたらしした宣教師を絞り込むのは容易ではないが、大坂城にもたらされたという仮説に基づいて、1615年まで大坂城に関わった宣教師について概観したい。

羽柴筑前守秀吉は、数年間は宣教師に対して好意的であった。高山右近の仲介で、天正12（1584）年に完成した大坂城で宣教師に土地を寄進し、高槻に逃れていた安土のセミナリヨを大坂に移すように命じ、河内岡山の砂の教会の移築を認めた。天満橋近くの秀吉から譲り受けた土地に再生された教会は、宣教師と諸国大名の出会いの場となった。牧村政治、蒲生氏郷、黒田孝高（官兵衛）、毛利高政らに洗礼を受けたセスベデス宣教師は、同年だけで「二百人以上の身分の高い侍たち」が大坂城教会を訪れたと記している。

秀吉の周囲にもキリシタンが多く、小西行長の父小西隆佐は秀吉の財務大臣で、安威シモンは秀吉の秘書を勤めた。彼は大坂城落城までとどまった。北政所にはマグダレナきやくしん、シンサ・ガヨの妻とその娘が仕えていた。北政

所の兄木下家定の四男ヤズモン・ペトロは、1604年に受洗したことが知られ、このことで父からも北政所からも厳しく遇されたが信仰を捨てなかった<sup>38)</sup>。

#### 4. 宣教と銅版画

アジア宣教をめざす宣教師たちが、多くの画像を持参しており、文字によるよりもまず画像を示して関心や心を掴もうとしたことは良く知られている。たとえば、スペイン王カルロス1世に仕えたポルトガル人マゼランの一行が、フィリピンのセブ島に着いて一週間も経たないうちにアウグスティヌス会在俗司祭のペドロ・デ・ヴァルデルラーマが地元の女王に洗礼を施した際、まず聖母の画像と子供イエス [図18] の像を見せると、女王は涙を流して洗礼を乞い、それらの像を所望したという<sup>39)</sup>。また、1549年8月15日に鹿児島に到着したザビエルが、9月29日に通訳のヤジローと共に島津貴久の招きで城に参内したとき、ザビエルはインドから携えてきた豪華な装飾をほどこした聖書を他の本と一緒に進呈したが、幼子を抱いた聖母マリヤの絵を貴久とその母がことのほか気に入る、数日後に模写を所望したという。また、短い日本語版公教要理を作って、辻説法をしたことが伝えられる<sup>40)</sup>。

ザビエルの後に来るイエズス会士たちは、それを書きなおし、完成するように努め、ついに1590年、天正少年遣欧使節団の帰国とともに活版印刷機が到来し、翌年『どちりいなキリシタン』として印刷され、広められた<sup>41)</sup>。1591年から1614年まで日本で印刷されたイエズス会公認の版本を「キリシタン版」と呼び、現存するものは31種約73点を数える。

ザビエルが携えたとされる豪華な装飾を施した聖書は、発見されていない。1540年に認可を得て発足したイエズス会総会長イグナティウス・ロヨラ（1491頃-1556）は、聖書の各場面におけるキリストの救済活動、受難、復活の観想を含む修行を「霊操」として体系化した。死の直前、会員のヘロニモ・ナダール（ジェローム・ナダール、1507-1580）を呼んで聖書におけるイエスの活動の観想のための銅版画製作プロジェクトをすすめるように言い遺した。ナダール



図18 ニケフォロ・ロホ、ヴィエントス・デ・アカプルコ  
《1565年フィリピンに上陸した最初のアウグスティーン会士》

はイエズス会結成メンバーではなかったが、1542年にザビエルがインドから送った手紙に感銘を受けて、45年に会員となり、総長代理などの要職を歴任した。ナダルはロヨラの遺言にしたがってさまざまな芸術家に153点の銅版画を依頼し、各場面に場面の説明となるキャプションを執筆した。この『福音書画伝 *Evangelicae Historiae Imagines*』〔図19〕は、彼の死後1593年にアントウェルペンで出版された。

この出版物がアジア宣教で使用された可能性は、ナダルとザビエルとの関係からもあきらかであり、中国におけるフランドルのイエズス会士フランソワ・



図19 ナダル『福音書画伝 *Evangelicae Historiae Imagines*』  
 (『福音書の注釈と瞑想』) lvi. 43

ド・ルジュモン (1624-1676) が、1658年の書簡において、ナダルの『福音書画伝』の新版が、ポルトガル=インドのイエズス会総長代理の資金援助でアントウェルペンのハル一族に発注されたことを伝えている。この銅版画が実際に制作されたかどうかは不明であるが、遅くともマテオ・リッチ (1552-1610) がマカオのポルトガル居留地に到着して宣教を開始した1582年以降、あるいはそれまでにも、中国には画像や銅版画がもちこまれていた<sup>42)</sup>。

ナダルの『福音書画伝』に関しては、ポルトガルのイエズス会士ガスパル・フェレイラ (1571-1649) が1619-23年頃に、同会士ジュアオ・ダ・ローシャ



図20 イエズス会士ジュリオ・アレニ『天主降生出像經解（天主イエス・キリストの生涯の図解）』中国製木版画，1637年，大英博物館

（ローチャ、1565-1623）の協力で執筆した『誦念珠規程（ロザリオの祈りの規程）』にその図版の一部が用いられている。また、イタリア人イエズス会士ジュリオ・アレニ（1582-1649）が、1635年から37年にかけて福州に棲んでいた折、『福音書画伝』の中国語版『天主降生出像經解（天主（イエス・キリスト）の生涯の図解）』[図20]を準備した<sup>43</sup>。これらのことは、中国のイエズス会『年次報告』から知られるが、日本においても、1579年来日した巡察師ヴァリヤーノの指示によって、個人の書簡だったイエズス会士日本通信のあり方が改められ、公式年間報告を毎年ローマに送るという日本年報の制度が確立し、

1579年から1626年まで、この形式のものが作られた<sup>44)</sup>。

ザビエルがアジアへ派遣されたのは、ポルトガル国王ジョアン3世の要請を受けてのことであった。ザビエルは、マカオの南西数十キロに浮かぶ上川島で1552年に没し、遺体はマラッカに移送され、翌年ゴアの聖パウロ学院に移送され、現在ゴアのボム・ジェズ教会に安置されている。ザビエルは生前より「パードレ・サント」と呼ばれ、上川島での急死と、同地の仮埋葬で腐敗しなかったとされる奇跡により、崇敬の念が高まり、1556年にはジョアン3世の命令でザビエル関係の資料が収集されている。これは列聖のための準備であるが、ザビエルは1619年10月25日に教皇パウルス5世によって列福され、1622年3月12日にイグナチウス・ロヨラとともに教皇グレゴリウス15世によって列聖された<sup>45)</sup>。福者の場合 Beatus の B がつけられ、聖人の場合 Saint の称号や光輪がつけられるため、これらを基準にメダイや画像の制作年代が絞られる場合があるが、必ずしも絶対的な基準とはならない。

たとえば、トマス・アクィナスの列聖に関して、1274年のトマスの死後、遺体が数々の奇跡を起こしたとして民間でトマス信仰が広まったにも拘わらず、異端とされたラテン・アヴェロエス主義への関与を疑われたため、列聖運動が軌道に乗ったのは1318年で、最終的に列聖されたのは1323年のことである。その間、列聖を主導したピサのサンタ・カテリーナ聖堂の主祭壇画において、すでに聖人と同列の扱いで描かれている。これほど長い時間がかかったのは、教会聖職者やトマスが属したドメニコ会内部からの批判があり、フランチェスコ会からの異議申し立てがあったためである<sup>46)</sup>。ザビエルやロヨラの列聖に70年近くかかったのは、ザビエルを派遣したポルトガルのアヴィス朝断絶により、スペインに併合されたことや、二人がナバラ王国出身であることが有利には働かず、またヨーロッパにおけるイエズス会と教皇庁の力関係に原因があるが、この問題は稿を改めたい。

七祈願の銅版画が最初に発見された千提寺の東家では、ザビエルの肖像画(神戸市立博物館)<sup>47)</sup>も発見されている。その制作年代に関して、この画面に



見られるザビエル列聖との関係を考慮するべきだとすると1622年以降にしなければならない。しかしながらそれでは、宣教師たちが追放されてからかなりの年月が経ってから制作されて秘蔵されたことになり、何のために制作された肖像だったのかわからなくなってしまう。同じく発見されたマリヤ十五玄義図も、ロヨラとザビエルがともに描かれているものは、イエスへの祈り方を示すと同時に、二人の列福・列聖運動への支援を求めるためでもあろう。列福や列聖運動のために制作されたとし、日本の支配者層からその援助が得ることを目的とするなら、やはり、多くの人の目に触れるために制作され、大坂城教会に置かれたとみるのが妥当であるように思われる。

ところで、霊操や、ナダルの福音書をはじめとしたイエスの生涯への観想を軸としたイエズス会のイメージ構成に鑑みるなら、七秘蹟と七美德と七祈願を組み合わせた本銅版画の構成は、系譜の違いを感じさせる。2017年に対面したウフィツィ美術館のジョルジオ・マリニ氏が、イエズス会の構想とすることに違和感を述べたのも、このことに起因したのであろう。

1591年にイエズス会管区長によって準備され印刷された『どちらいなキリシタン』においても主祷文の七請願はもっとも重要な祈りとして記されている。また七秘蹟は、第十一の教えで「洗礼」「堅信」「聖体」「告解」「終油」「叙階」「結婚」の順に記されているが<sup>48)</sup>、銅版画では「洗礼」「堅信」「品級（叙階）」「聖餐（聖体拝領、聖体）」「懺悔（告解）」「婚姻（結婚）」「終油」の順になっている。掲載順序は、必ずしも重要性の度合いに対応するとは限らないが、「品級（叙階）」という聖職者にとって重要なことが早い段階に置かれていることから、聖職者養成向けにセミナリオなどで使われていた可能性もあるだろう。『どちらいなキリシタン』において、七つの大罪については第十の教えとして扱いが大きい。七美德は第十二の「このほかキリシタンにとって大切な、いくつものこと」の中で神的な徳として「信仰」「希望」「愛」枢要な徳として「賢慮」「正義」「剛毅」「節制」となっており、銅版画の「信仰」「希望」「慈愛」「節制」「正義」「賢明」「剛毅」のように七美德としては扱われていない。イエズ

ス会の教義は伝統的なカトリックの教義を基礎としているが、順番の違いや、美德の扱いなどの微細な相違に、イエズス会との距離を感じざるを得ない。

七秘蹟の体系化はドミニコ会のトマス・アクィナスに帰すことができ、『神学大全』において七秘蹟と七美德と七悪徳とが組み合わせて論じられている。1325年頃にパリのジャン・ピュッセルの工房でジャンヌ・ド・ベルヴィルのために制作されたドミニコ会式の聖務日課書では、秘蹟が神学的象徴体系の中に組み込まれている。楽園に立つ十字架を描いた最初のページに続くページのバ・ド・パージュには、七秘蹟のひとつひとつの擬人像が、左の悪徳と右の美德に挟まれて、聖霊の導きで美德の方へ引き寄せられている。これに対して、七秘蹟の七美德や七請願との組み合わせは、フランシスコ会のボナヴェントウラの『神学綱要（ブレヴィロクイウム）』（V, 10, 5）にも述べられているが、順番や組み合わせに差異がある<sup>49)</sup>。これらの組み合わせに関する図像面からの考察は稿を改めたい。

ザビエル以来の伝統をもつイエズス会に対して、スペイン系のドミニコ会士ではじめて日本を訪れたのは文禄元（1592）年にフィリピンからフィリピン総督の使節として来日し秀吉に謁見したファン・コボであり、翌年同じくフィリピン総督の使節としてフランシスコ会ペドロ・バプチスタが来日し肥前国名古屋で秀吉に謁見している。アウグスティーノ会士の初来日は1584年である。1600年、教皇クレメンス8世はそれまでイエズス会にのみ認可していた日本の宣教活動を正式にすべての修道会に認めた。秀吉の伴天連追放令や26聖人の処刑などの弾圧はあったものの、1614年の大坂の陣まで、大坂城にはかなり自由にさまざまな修道会の宣教師たちが出入りしていた。

まとめに代えて

茨木市立文化財資料館に保管されている6枚の銅版画シリーズ「七秘蹟と七美德がある主の祈りの七祈願」（いわゆる「天使讃仰図」）をめぐって、本稿では本銅版画シリーズの受容者層と用途について考察をすすめた。

受容者について、発見場所と地域の特性に鑑みるなら、高山右近の領地なのでキリシタンが多く、禁教令以降カクレキリシタンが、本銅版画シリーズを大切に保管したという説明は、必ずしも当てはまるものではないように思われる。すなわち千提寺・下音羽地区で高山父子が直接布教活動をした証拠を見いだすことはできない。しかしながら摂津の国人衆の間では早くからキリスト教が広がっており、大坂の陣までの最後の北摂領主安威氏がキリシタンであったことから、キリシタンを受け入れやすい土壌があったのは間違いない。

その一方で、千提寺・下音羽地区で発見されたキリシタン遺物の質は非常に高く、屈指の遺物群だといえるが、発見地一帯が人里離れた寒村ともいえる場所なので、そのギャップを説明する必要があるだろう。ここでは、豊臣秀吉の治世に、伴天連追放令が出され、26聖人の殉教事件があっても、1614年の本格的な禁教令の発布までは、大坂城を拠点として宣教師たちが比較的ゆるやかに活動することができたことを前提とした。

ヨーロッパでは、ザビエルの死後イエズス会による列福・列聖運動があったと思われるが、彼らが基盤としていたポルトガルの併合や、各地の絶対王政との軋轢から、列聖が遅れていたロヨラとの合同の運動が展開されていた。イエズス会は、日本の首長級の人物による支援をとりつけるために、イメージのフライングともいうべき戦略をとったのではないだろうか。しかしながらイエズス会によるイメージ戦略と、七祈願シリーズには距離がある。この距離は、1600年頃から本格的に日本に入ってきた別の修道会の存在によって説明される。銅版画の内容から、教義や儀式の式次第の提示に用いられた可能性が高い。図像構成や儀式内容については、今後他の修道会のものを含めて掘り下げる必要があろう。

千提寺・下音羽地区に秘蔵された宣教用資材は大坂の陣において壊滅状態となった大坂城から宣教師たちが避難させたもので、この地区は宣教師や文物を匿う役割を果たしたと思われるのである。

本稿は、公益財団法人DNP文化振興財団による2021-2022年助成研究「16世紀にキリスト教宣教師がもたらした銅版画の役割」の研究成果の一部である。

注

- 1) 拙著「茨木市立文化財資料館蔵『七秘蹟と七美德がある主の祈りの七祈願（いわゆる「天使讃仰図」）について」関西大学『東西学術研究所紀要』第52号（2019年4月1日）51-77ページ；拙著「マテウス・グロイターの地誌的風景画—「領域の視覚的フレーミング」へ向けて」関西大学『文學論集』第67巻第1号（2017年7月）1-28ページ。
- 2) 拙著「三角形と四角形のニンプス—茨木市立文化財資料館の『七秘蹟と七美德のある主の祈りの七祈願』をめぐって—」新谷英治・松井幸一編『祈りと祈りの場』関西大学東西学術研究所研究叢書第10号比較信仰文化研究班（2020年3月）49-78ページ。
- 3) 茨木市教育委員会『千提寺・下音羽のキリシタン遺跡』平成25（2013）年7月31日（第6版）6-7ページ。茨木市立文化財資料館編『茨木のキリシタン遺物—信仰を捧げた人々—』茨木市教育委員会，平成30（2018）年3月19日，6-8ページ。
- 4) 縦軸が長いラテン十字に銘板が着けられた複十字はロレーヌ十字とも呼ばれ，西洋ではもっぱら総大司教に用いられた。J.ホール，高階秀爾訳『西洋美術解説辞典』11版，河出書房新社，1999年，p.157。切支丹の間ではカムフラージュのために「千」の字を用いたのかもしれない。
- 5) 図版は，前掲『茨木のキリシタン遺物』10ページ。同書27ページには，これ以外に慶長6（1601）年の「佐保カララ（クララ?）」の墓碑，およびギリシャ十字の文を刻む墓碑の図版が掲載されている。ギリシャ十字は，慶長10（1610）年の「せにはらまるた」，慶長18（1613）年（下音羽高雲寺にて発見），慶長□年8月21日の「くほまりや」（下音羽，井上政彦家）他にも見られる（前掲『千提寺・下音羽のキリシタン遺跡』19-22ページ）。身体を伸ばした伸展葬の，長方形のキリシタン墓の発見については，『千提寺西遺跡日奈戸遺跡 千提寺市阪遺跡 千提寺クルス山遺跡（大阪府文化財センター調査報告書第256集）』公益財団法人大阪府文化財センター 平成27（2015）年6月。また他地域のキリシタン墓については，別府大学文化財研究所，九州考古学会，大分県考古学会編『キリシタン大名の考古学』思文閣出版，平成26（2014）年（第2版）所収，高橋公一「高槻城キリシタン墓地」（19-22ページ）；田中祐介「豊後府内のキリスト教会墓地」（40-41ページ）をみよ。
- 6) 1865年に長崎の大浦天主堂において，パリ外国宣教会のプティ＝ジャン神父の前に，同地浦上地区にかくれていたキリシタンが現れてから以降も，1867年に明治政府は浦上四番崩れと呼ばれるキリシタン弾圧を行なった。これに対するキリスト教国からの抗議により，1873年に禁教を記した高札が撤去された。しかしながら，これ以降も弾圧を避け

- るために潜伏を続けるキリシタンは存在した。拙著「出現と痕跡―バリ外国宣教会を手がかりに」関西大学『東西学術研究所紀要』第49号（2016年4月1日）163-188ページを参照。
- 7) 前掲『千提寺・下音羽のキリシタン遺跡』7ページ。NHKBS プレミアム「名品の来歴 聖フランシスコ・ザビエル像」（2021年11月27日放映）においてオラシヨが詠じられている。また、片岡弥吉「隠れ切支丹とオラシヨ」『隠れ切支丹 1973年5月～6月 平戸 生月にて録音』LPレコード解説、日本フォノグラム株式会社、昭和48年。
  - 8) 甲山堅『ザビエルコード：炎上する大坂城から金瓢筆を持ち出した切支丹 上笠五兵衛』e-Bookland, 2012年, 132-134ページ。
  - 9) 前掲『茨木のキリシタン遺物』19ページ, 29-32ページ。
  - 10) 『茨木市千提寺南遺跡（大阪府文化財センター調査報告書第245集）』公益財団法人大阪府文化財センター 平成26（2014）年3月, 5ページ。浄土真宗の強力な布教活動については、伊東理責任編集『図説地理 近現代の茨木』[新修 茨木市史 史料集17] 茨木市, 2013年, 18-19ページ。甲山 2012, 28ページによれば、古文書には寺をつけずに「千提」とのみ記されている記事もある。
  - 11) 前掲『茨木市千提寺南遺跡』7ページ。
  - 12) 仁木宏「戦国・信長時代の茨木の町と茨木氏」中村博司編『よみがえる茨木城』清文堂, 2007年, 3-6ページ。
  - 13) 中西裕樹『戦国摂津の下克上 高山右近と中川清秀』中世武士選書41, 戎光祥出版, 2019年, 8-9ページ。
  - 14) 前掲『茨木市千提寺南遺跡』5-7ページ。甲山 2012, 44-47ページは、八党盟約衆と呼ばれた摂津国人グループがあり、室町家人あるいは室町家勤仕であった点が共通していると述べる。中西 2019, 116ページによれば「摂州衆」「摂州上下の国衆」という用語も用いられていた。
  - 15) 片岡健「摂津国茨木の空間構造と交通路」前掲『よみがえる茨木城』115-149ページ。
  - 16) 山崎合戦の後で本山寺を焼き払ったのは、そこに避難した明智残軍を追跡したためであった。H.チースリク『高山右近史話』第5刷, 聖母文庫, 2007年, 30-31ページ。
  - 17) 中西 2019, 173-174ページ。
  - 18) たとえば、受洗前の国人高山飛騨守と高山荘と荘園支配の中心にあった勝尾寺の関係において、勝尾寺の年貢納帳が天文13（1544）年を最後として、高山氏に移行したことが参考になる。中西 2019, 114-115ページ。
  - 19) イルマン・ロレンソについては、結城了悟『イルマン キリシタン時代のイエズス会修道士』日本二十六聖人記念館, 2001年, 75-99ページをみよ。
  - 20) 結城忠正と息子左衛門尉は洗礼を受け、飯盛城の出城である河内岡山城（四條畷市）に戻り、近くの砂の地に教会堂を建てた。飯盛城では73名の武士が洗礼を受けた。1565年



左衛門尉アンタンは毒殺され、このとき彼のために日本で初めてキリスト教式の葬儀が  
挙行された。彼の死後、その息子結城ジョアンが家督を相続し、伯父の弥平次が後見人  
になって、1577年頃、砂に美しい教会堂を建設した。1581年には巡察師ヴァリニャーノ  
一行が堺に到着し、八尾、三箇で歓待を受け、新しく建った砂の教会堂と宣教師館に一  
泊した。しかし翌年光秀に味方した三箇城は滅び、結城ジョアンは他国に移された。神  
田広大、大石一久、小林義孝『戦国河内キリシタンの世界』撰河泉地域文化研究所編、  
批評社、2016年。

- 21) ルイス・フロイス、松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史1 織田信長篇I』3刷、  
中公文庫、2010年、176-178ページ。
- 22) 中西 2019、166-193ページ。
- 23) チースリク 2007、31-36ページ。
- 24) 中西 2019、174-179ページ。
- 25) 同書、126-128ページ。
- 26) 甲山 2012、55-59ページ。
- 27) 片岡 2007、137-149ページ。
- 28) 中西 2019、166-193ページ。
- 29) キリシタン大名に対する武器援助については、高橋裕史『武器・十字架と戦国日本』  
130-143ページ。間断ない射撃については、ヨーロッパでは15世紀末から16世紀にかけ  
て行なわれている。
- 30) 甲山 2012、178-183ページ。
- 31) 中西 2019、221-249ページ。
- 32) 甲山 2012、143-144ページ、『ミステリアス! 竹田キリシタン』大分県竹田市、平成  
29年。茨木市と竹田市は中川氏統治を縁として文化姉妹都市となっている。
- 33) 中西 2019、221-249ページ；『完訳フロイス日本史4 豊臣秀吉篇I』再版、中公文庫、  
2008年；チースリク2007、197-376ページ。
- 34) 甲山 2012参照。
- 35) 中西 2019、120-121ページ。
- 36) チースリク 2007、146-147ページ。
- 37) 注1、2を参照。
- 38) チースリク 2007、301-316ページほか。
- 39) 拙著「子供神」考へ向けて—セブのサント・ニーニョを中心に—『関西大学東西学術  
研究所創立六十周年記念論文集』2011、188-189ページ。
- 40) ホアン・カトレット、金子桂子訳『東洋の使徒、聖フランシスコ・ザビエル』新世社、  
1998年、120-124ページ。
- 41) ベトロ・ネメシエギ「はじめに」『現代語訳 ドチリイナ・キリシタン』（宮脇白夜訳）

- 第3版, 聖母文庫, 2012, 7-8ページ。ひらがな「どちりいな」は当時の記述に基づく。
- 42) ヴイトール・テイシェイラ, 拙訳「ハート形: ポルトガル海上帝国におけるハートの象徴, 図像, 芸術, 日の出に向かうハート」拙編『ハート形のイメージ世界: 見えるものと見えないもの』晃洋書房, 2021年, 28-36ページ。
  - 43) 同書には, 中国に銅版画がもたらされた経緯や, 中国人画家がそれを元に画像を制作していたこと, 宣教師がヨーロッパから銅版画の送付を依頼していることなどが, 述べられている。アレニの書は, バチカン図書館 (Barberini Orient 336-5) やフランス国立図書館 (Chinois 6861) に単刊としても所蔵されているが, 元々は同じ編者による『天主聖教啟蒙』と一体のものと考えられる。内田慶市編著『文化の翻訳としての聖画像の変容 ヨーロッパ—中国—長崎』関西大学東西学術研究所, 2021年, 3-9ページ。
  - 44) 展覧会図録『大ザビエル展, 来日450周年 その生涯と南蛮文化の遺宝』ザビエル展実行委員会, 1999年, 100-103ページ。
  - 45) 鹿毛敏夫編『描かれたザビエルと戦国日本 西欧画家のアジア認識』勉誠出版, 2017年参照。
  - 46) 松原知生「列聖の条件, 聖者の身体: ピサ, サンタ・カテリーナ聖堂《聖トマス・アクィナスの勝利》をめぐって」『研究紀要』(京都大学文学部美学研究室) 18 (1997), 187-230ページ。
  - 47) 塚原晃「神戸市立博物館蔵「聖フランシスコ・ザビエル像」の保存状態と表現解釈」神戸市立博物館『研究紀要』第35号, 2019年, 5-15ページ。
  - 48) 『現代語訳 ドチリイナ・キリシタン』(宮脇白夜訳) 第3版, 聖母文庫, 2012。
  - 49) Servus Gieben, *Christian Sacrament and Devotion*, Leiden, 1980。

## 図版出展一覧

- Abe Florendo, ed. *Santo Niño, The Holy Child Devotion in Philippines*, Manila: Congregacion del Santisimo Nombre de Niño Jesus, 2001. 図18
- Jerome Nadal, S. J., *Annotations and Meditations on the Gospels*, trans. by F. A. Homann, S. J. with an introductory study by W. Melion, St. Joseph's UP, 2003. 図19
- The New Hollstein German Engravings, Etching and Woodcuts 1400-1700, The Greuter Family Part I, Matthäus Greuter, Sound & Vision Publishers*, 2016. 図7 a, 図7 b, 図15, 図17
- 『茨木市千提寺南遺跡 (大阪府文化財センター調査報告書第245集)』公益財団法人大阪府文化財センター, 平成26 (2014) 年3月. 図10
- 茨木市立文化財資料館編『茨木のキリシタン遺物—信仰を捧げた人々—』茨木市教育委員会, 平成30 (2018) 年 図1-6, 図8, 図9, 図11, 図16
- 高槻城跡のキリシタン墓地群 (y-morimoto.com) 2021年12月21日確認 図14

中村博司編『よみがえる茨木城』清文堂, 2007年. 図12

蜷川順子編『ハート形のイメージ世界: 見えるものと見えないもの』晃洋書房, 2021年.

図20